しよう。

第二部　國土計畫に關する特殊論考

第一章　國土計畫の最終課題たる生活計畫について

第二章　都力測定及都力より見たる日本の國土構造

第三章　本邦各都市に於ける工場誘致の概況

第四章　國土計畫と商店街

第五章　都市計畫による都市振興讀本

かくて第二部は本書の主題でもあるのであるが、その各章の紹介は暫く措くとしても、右目次に見らるゝ如く種々の方面より鄕土日本の將來に對して、くもりなく、然し强く張りたる眼を放たれてゐる。著者の意圖する所は、本書によつて何人かの人達が、又かくあらんことを希はれるわけである。

國土計畫の問題は地理學と多く交渉の面をもつ。地理學に限らず、他の諸科學との關聯も大である。こゝに於いて本書を地理學徒のみならず、廣く諸學の徒に、尙更に廣くは一般國民に一讀をすゝめたいと思ふ。かくてこそ當今の要請たる高度國防國家日本の建設は著しく促進されることゝなるであらう。

石川氏の本著と共に、慶大教授奥井復太郎氏の國土計畫論、商工省吉田秀夫氏の國土計畫論等を併せ一讀せらるれば、國土計畫の何たるかが一層明快となるであらう。（昭和十六年五月、東京八元社發行、A5判三六八頁、定價三圓六十錢）〔西田和夫〕

開拓民問題

入江久夫著

滿鐵弘報課編「東亞新書」の第一期刊行書の一つとして「開拓民問題」が出た。著書入江久夫氏は京大地理出身、滿鐵調査部勤務の人である。開拓民乃至開拓民問題に關する文獻は極めて多い。官廳の報告、或は案内書風のもの、開拓年鑑の如く全般を知るに好都合のもの、公私樣々の視察者の報告、もつとくだけて小說、隨筆に類するもの、或は農業又は經濟の專門家の研究調査等、汗牛充棟も只ならざるものがある。それ等の中にこの「開拓民問題」は僅かに八十頁餘の小册子として登場したに過ぎず、極めて微々たるものであるが、其の內容に於ては決して貧しいものではない。

著者は、開拓民の通つて來た過去の道は、日本の農村の立場から、或は滿洲の政治經濟的理由から、多くの紆餘曲折があり、今となつて見れば道標の置きどころを變へなければならないところが多くなつて來たが、そこに開拓民問題が起つて來るとなして、先づ問題の所在を明かにし、國家によつて與へられる開拓民の使命と、開拓民の私經濟的立場との間に隔りがあり、開拓民の立場は開拓國策と私經濟が相調和する點に置かれる、と說いてゐる。次に開拓地農業の實際を記して、開拓民が滿洲へ來て先づ習得しなければならなかつた在來農法が、一般に自家勞力の少い開拓民に取つて多大の雇傭勞力を要し、それが負擔の最大なるものとなること、また北滿で一〇町歩といふ經營規模は滿人農家で云へ

ば貧農群に屬するもので、經營面積が大きくなるに伴つて、所要勞力、畜力が相對的に少くて濟み、有利な採算が取れる北滿農業の現狀から云へば、農業收入のみによつて維持出來ぬ過小農であるとし、現金收入を計る道としての副業の重要性を說き、しかし國策の命ずる條件の下に於ける農耕のみによつては生活維持が困難であるし、副業も一定の限度があるとしたならば、農業方法其のものを再檢討せねばならず、其の結果、北海道農法の採用、或は大陸新農法の確立等が叫ばれたとして、問題の焦點が向けられた方向を明かにしてゐる。次いでこの問題解決の一方法として試みられた、北海道農法の移入、特に實驗農家の示した成績に就いてやゝ詳細に說き、また北學由開拓團の經驗を記して、これ等の試みは、開拓問題に曙光を見出さしたかの如くであり、新農法最大の功績は苦力問題を解決したことであつて、それは洋式畜力機械の導入によつて除草が行はれたからであるが、この農法では高畦をとることが出來ず、新農法の可否はこの高畦か平畦かによつて決定すると言はれたが、平畦が多少の缺點を有するとしても、そのために新農法が排斥さるべきでないと言ひ、但し北海道の農具がそのまゝ開拓民には使用出來ぬので、開拓民の經驗と各開拓團へ入つた農具製造者の技術が結びついた時に、始めて北滿各地に適する農具が完成し、大陸農法の基礎が築かれる、としてゐる。最後に開拓地農地制度と開拓民組織に就いて記して『日本文化を本とする新しい開拓民の精神的並に物質的文化は、滿洲の曠野に展開せられ、所謂大陸農法の完成によつて、滿人の經濟生活に光明を與へると共に、街村制を通じて、開拓地文化は滿洲農村に滲透し、開拓國策の實は徐々に擧げられるであらう。』と結んでゐる。

以上聊か內容の紹介に忠實過ぎたかも知れぬが、入江氏の『開拓民問題』を繙く人が、そこに此の問題に對する入江氏の新しい考へ方とか、獨自の見解とか云ふものを見出さうとするならば或は失望する事があるかも知れぬ。この書の最も力を入れた點は、大陸新農法確立の經過を叙述するところにあると思はれるが、入江氏は農業の專門家ではない。新農法を良しとするのも、勿論自己の實驗的結果から來たものではない。その爲には別に松野傳氏『滿洲開拓と北海道農業』の如き、七〇〇頁を越える大著がある。『開拓民問題』の持つ特色と使命は、正確妥當な資料を適宜に驅使することによつて、過去の經驗を忠實に描寫し、現在の情勢を正確に把握させ、そして滿洲の農業開拓が北海道農法の採用によつて新しい道を開くべきことを記してゐるのであつて、そこには或は入江氏の私見の入る餘地が無かつたかも知れぬが、本書の價値はむしろその爲にこそ高く買はれるべきである。といふのは、從來の開拓關係の文獻にはあまりにも、其の著者の個性が强く、私見が大部分を占めて、讀者をして歸趨に迷はしめるものが多過ぎた。悲觀論と樂觀論とが對立して、或は開拓の失敗を叫び、成功を言ひ、歸するところを知らしめなかつたのである。入江氏は問題を悲觀も樂觀もしてゐない。現實を嚴かに注視してゐる。しかも地域的な考慮を忘れぬところに、局部的な現地視察者の報告と異る點がある。また當局の計畫や報告も一應嚴しい檢討を受けて

ある。

此の『開拓民問題』がどのやうな讀者層に受け入れられるものか、紹介者には想像出來ないが、之が日本內地農村の中堅分子によつて繙かれる時に、其の本來の役割を果すのではあるまいか。『開拓民問題』は開拓民たらんとするものゝ教科書である。そこには宣傳が無く、冷い現實が書かれてゐるが、將來への希望もまた力强く示されてゐる。滿洲へ行けば十町歩の地主になれると思ひ、またそのやうな農民の希望につけ込むやうな宣傳は改められなければならないが、悲觀的な現地報告の類も排斥さるべきで、其の爲に此の手頃な小册子が登場した事は慶賀すべきである。しかも、論旨が終始一貫して、いさゝかの矛盾なきは著者の用意の良さを示し、多くの具體的數字を擧げつゝも、行文流麗にして一氣に讀了せしむるところの盡きざる興味を備へてゐる。(滿鐵弘報課編『東亞新書』の中、昭和十六年六月中央公論社發行、八四頁、定價八〇錢)〔淺井得一〕

Ruth Benedict; RACE; SCIENCE AND POLITICS, New York 1940.

何時の世にも、又何處の國でも、人種論が稱へられない事はないが、何か歷史の轉換期となると特にそれが强く現はれるやうである。一例を擧げるならば、明治初年の我國とか、最近の獨乙とかの如きである。明治初年に於ける我國の人種論は日本人の劣等性を認め、それを改良する爲には他の優秀人種と混血すべきであるとの說まで生んだが、最近に於ける獨乙の人種論は己れこそ世界最優秀の人種であり、從てその純血を保たねばならぬと主張する。前者と後者とではその意味する處正に正反對であるが、どちらも人種學的に科學的根據を缺いてゐる點では相通ずるものがある。

一體、白人は優越感が强く、白人でないものは人間でないやうな考を有ち勝ちである。曾ての黑人奴隸制度や支那人の强制勞働の如きはその現はれの一つと言へる。排日とか黃禍論の如きも、一つは日本人や東洋人に對する恐怖のせいであるが、一つは白人の優越感から來てゐることも否めない。最近、歐洲のある指導者は日本は月みたいなものだと暗に日本人の創造性の無いこと、從つて彼の屬する人種よりより劣等であるやうに述べてゐるが、これは現狀のみに捉はれた考へ方で、さう言ふ彼等が曾ては他國文明の模倣者であつた事を忘れてしまつてゐる。獨乙あたりの人種學の本をみると、大てい己れの屬する人種が歐洲の中でも生來最優秀であるかのやうに書いてゐるが、これも結局獨りよがりの優越感の產物でしかなく、科學的根據は極めて薄弱である。

白人が特に優越感に富むと言ふのも、その人種に特に備はるものではなく、恐らく社會的環境の然らしめたものであらう。日本人も最近では可成り優越感を有ち始め、他人種との混血によつて、その素質を向上せしめやうなどといふ考へは最早や昔の夢物語となつて了つた。

凡そ人種と人種の優秀性とは全然無關係のものであつて、人種